



『**僕とロシアの物語**』 林 保明



★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。



ロシアがまだソ連と呼ばれていた子供の頃、僕の故郷横浜から極東のナホトカまで、客船が多い時には週1便通っていた。もう50年以上も前の話である。それはソ連崩壊後の1992年まで続いていた。

大栈橋の出航風景も何度か見たことがある。色とりどりのテープが投げられ、船上のロックバンドがロシア民謡『カチューシャ』を演奏していた。

その当時の横浜には米軍の駐屯地などがあって、アメリカ人を目にする機会が多く、子供達の間では、外国と言うと『アメリカ!』と答えるのがごく一般的な世界観だった。テレビでは、アメリカのホームドラマと西部劇が毎日のように流れていた。

だが一方で、ラジオから時々聞こえてくる、哀愁のあるロシア民謡は、音楽好きな僕の心に抵抗なく入って来た。『ともしび』(夜霧のかなたに、別れを告げ…)、『すずらん』(ある夏の夜、静かな森を一人歩くとき…)、今でもその歌詞はすぐに思い出す。「素晴らしき、モスクワ郊外の…」と言う、『モスクワ郊外の夕べ』を聞いたたびに、「いつか、夏のモスクワの町を歩いてみたい!」と思っていた。

まだ共産主義が、ある種理想のように語られていた時代である。科学技術や芸術の分野では、ソ連はアメリカより進んでいるというイメージがあった。

そのせいか、大学の教養課程では第二外国語にロシア語を選んだ。シベリア鉄道経由でヨーロッパへ行くことが若者の夢だった時代のことだ。





そう家庭に風呂などまだ無かった時代、銭湯への道すがら夏の夕空を見上げると、ひとときわ輝く大きな星がゆっくりと動いていた。「あ、人工衛星だ!」、排気ガスやネオンサインなど無関係な50年前の横浜の空は、夕焼けが映え、雨上がりには虹が見えるほどに綺麗だった。車がめったに通らない道路の真ん中から大空が見渡せた。宇宙への夢が少年の心を躍らせた。

『鉄腕アトム』が生まれた時代、スプートニク、ボストーク、ガガーリン、テレシコワ…、宇宙への夢を通して、僕の科学技術への興味は、南極観測船「宗谷」、越冬隊、テレビの宇宙中継へと引き継がれて行く、科学と技術がダイナミックに飛躍した時代だ。東西の政治の冷たさとは裏腹に、熱い好奇心がこの時代に育った少年の心を駆り立てて居た。

そしてアポロ…、時代はアメリカが引張って行った。

写真リスト

- 1.SLノスタルジーツアー (Moscow ,4 Sep,2011)
- 2.SLノスタルジーツアー (Moscow ,4 Sep,2011)
- 3.地下鉄駅のレーニン像 (Moscow ,3 Sep,2011)
- 4.機関区の戦争慰霊碑 (Moscow ,4 Sep,2011)
- 5.宇宙飛行士記念館・モニュメント (Moscow ,4 Sep,2011)
- 6.宇宙飛行士記念館・宇宙服 (Moscow ,4 Sep,2011)
- 7.同上・ガガーリンの乗った宇宙船 (Moscow ,4 Sep,2011)
- 8.同上・ガガーリン像 (Moscow ,4 Sep,2011)
- 9.郊外の家・エリーナと父親 (Vyborg ,31 Aug,2011)
- 10.日本語学校・エリーナと友人 (St.Petersburg, 1 Sep,2011)
- 11.郊外の家・父親の仕事場 (Vyborg ,31 Aug,2011)
- 12.エリーナの会社 (St.Petersburg ,30 Aug,2011)



時移り、時代はめまぐるしく変化して行く。

1985年 ソ連共産党の書記長にミハイル・ゴルバチョフ氏が就任した。
共産党支配による政権腐敗を正すべくペレストロイカ（再構築）
グラスノスチ（情報公開）により民主化を進める。

これにより、東欧諸国に民主化の機運が高まり、ついに……

1989年11月9日 ベルリンの壁が崩壊

1991年12月25日 ゴルバチョフ大統領辞任によりソビエト連邦（ソ連）が崩壊

あのチェルノブイリ原発事故はソ連崩壊の5年前、ゴルバチョフ就任の1年後だった。
そして他人事でない東日本大震災、東電福島原発事故…、その機会は突然やって来た。

地震から3日目、安否を尋ねるロシア語の電子メールが届いた。前年の夏、ドイツのドレスデンで出会ったイリーナからのメールだ。娘のエリーナが日本語を勉強している。僕はすぐに返事を書いた。すると原発の放射能汚染水が、太平洋に流れ出ている事を報じたニュースのすぐ後に、また一通のメールが来た。

それにはサンクト・ペテルブルグ近郊の住所と共に『もしあなたに、この困難な状況をロシアで乗り越えて行く覚悟があるなら、私達はあなたの家族を迎える事が出来る!』と書いてあった。

「えー、どうして？」にわかには信じられない事であった。たしかにドレスデンの質素なホテルの食堂で5日間、僕らは毎朝話をしていただけで、その話の内容は普通の人なら3分で済んでしまうような事だ。それを1時間掛けて、片言の英語とロシア語で何とか意味が分かるまで話す。「サンクト・ペテルブルグには、ネバ川と言う大きな川があるだろう？、そこに沈む夕陽の写真を見て、僕は子供の頃行きたいと思ったんだ!」、「アー、リカ・ネバ、クラシーバヤ! (美しい)」

そんなこんなで、何だか良く分からないままに、避難する必要は感じて居なかったが、とにかくお礼が言いたくて、僕はロシアまで出かけて行った。

そして、サンクト・ペテルブルグ、フィンランド駅、2011年8月29日午後2時、赤いジャケットを着たシャラポワのような美人が、ホームに降り立った僕を迎えてくれたのだけれど、あいにく紙面が尽きた。それからの話は、また今度にしよう!



